

善意のカテゴリー化実践

——日常性の解剖としての差別問題学習 (2)——

大 庭 宣 尊

(受付 2004 年 10 月 12 日)

0. はじめに

ある言葉が、その出典・文脈から離れて独り歩きをし、意味を膨らませながら世に流通していくことはよくあることであろう。部落差別問題でいえば、「丑松」あるいは「丑松思想」などもそうではなからうか。

灘本昌久は、高校時代に読んだ野間宏による『破戒』の否定的評価や解放運動の中でくり返される「丑松思想を克服しよう！」というスローガンに触れながら、「そうした丑松にたいする否定的評価を特別に疑いもせず受け入れており、『破戒』をまともに読みとおすこともなかった」と、『破戒』との不幸な出会い」を記している〔灘本 1996a: 1-2〕。

私自身、これまで小説『破戒』（以下、単に『破戒』とする）を手にとってみることすらなかった。これといった理由はない。個人的なことを言えば、『破戒』と聞いて真っ先に思い出されるのは、モノクロ映画のポスターと、どこで聞いたかも定かでない“志保という役を演じた女優の芸名が、役名と原作者の名前からきている”という話だ。今回調べたところ、その映画は1962年、市川崑監督・主演市川雷蔵（八代目）のものであった。人気娯楽である映画もそろそろ「総天然色」が主流になっていく頃、ましてや、人気俳優雷蔵主演の映画である。学校の行き帰りに、映画ポスターをあきもせず眺めているような子であった私にとって、モノクロのポスターは、マイナーな（今で言う“イケてない”）イメージを残していったのかもしれない。また、私もおそらく、後年になって読んだ部落差別問題に関するさまざまな本から、漠然とであれ「丑松」なる人物に対する否定的評価

を受容していたのではないだろうか。

今回『破戒』を読んだのは、差別問題研究の一環として「差別－被差別関係の語られ方」を分析するためであった。『破戒』の評価をめぐるのは長く議論がなされてきており¹⁾、例えば、文学論としても、大ざっぱに言って「告白小説」か「社会小説」か、はたまた統一的把握かといった位置づけによって、その「作品」評価が大きく分かれていくようである。もとより私は文学方面には不案内であるから、文学論を展開する能力もないし、そのつもりもない。さらに言えば、本稿は『破戒』論をめざすものでもない。

かつて、北原泰作は、「近代文学における部落問題の発見は『破戒』によってなされた」[北原 1954: 61]と位置づけ、永らく絶版となっていた『破戒』初版本の復元を歓迎すると述べたあとで、「それは『破戒』を部落解放の文学作品として認めるからではなく、この小説が読み直され、そこに含まれている重大な問題が徹底的に検討されることに役立つ」ことを望んだ[同: 65]。後に再度触れることになるが、概して(ことに1950年代の)部落解放運動からの否定的評価には厳しいものがある。『破戒』の主人公が被差別部落出身者に設定されており、部落差別というものが優れて社会的カテゴリーをめぐる問題であるのだから、「語られる」側にすれば、どのような「語られ方」をしているかが文学理論を越えた関心事となっても、それは当然であろう。

ただ本稿では、別の「語られ方」に着目することによって、「部落問題を『過去の物語』としない」[北原 1953: 5]で、差別をめぐる今・ここでの関係性の解剖へとひらいていく読みの可能性を探ることに重点をおいていきたい。

1) 『破戒』論に関しては、1991年時点までのものではあるが、津田潔が詳細な文献目録を上梓している[津田 1991]。

1. 『破戒』と部落差別問題

私の担当する「同和教育論」（2004年度）の受講生に、『破戒』を読んだことがあるかどうかを尋ねたところ、200名程のうち誰ひとりとして読んだ者はいなかった。こういう事情を考えた時、屋上屋を重ねるおそれなしとはしないが、必要な範囲内で、『破戒』の内容等、作品自体について簡単に触れておくことも許されるだろう。

1.1. 『破戒』の梗概

主人公・瀬川丑松青年は師範学校出の小学校教員で、被差別部落出身である。丑松は父親からおのれの出自を「隠す」よう教えられている。丑松は「我は穢多なり」と書き出す『懺悔録』に激しく打たれ、その著者猪子蓮太郎に惹かれていき、次第に父の戒めに従うことに疑問を抱くようになる。

父が不慮の死を遂げ、その葬儀のため帰郷の途中に蓮太郎と出会った丑松は、敬愛の念を深める一方で、その人にも出自をうちあけることができない。同じく帰郷中に、丑松は蓮太郎が応援する議員候補者の対立候補・高柳と汽車に乗り合わせ、帰路でも再び同じ船に同乗することになる。高柳が同伴する新妻らしき若い女性は部落の資産家の娘であった。高柳は、丑松に互いの秘密が露見せぬようお互い口をつぐむという取引を持ちかけるが丑松は相手にしない。高柳は丑松を追い出すことを画策して丑松の出自を人に伝える。その噂は広がり、校長は自分と教育方針が異なり生徒の信望も厚い丑松を追い出す材料にしようとし、職員室では教員たちが丑松の出自を詮索しはじめる。ある教員などは、蓮太郎のことを「高が穢多じゃないか」などと言って丑松を挑発する。

蓮太郎は、応援演説で高柳が部落差別を利用して政略結婚をしたと論難した直後、高柳の放った刺客の兇刃に倒れる。蓮太郎の横死を知らされた丑松は、父の戒めを破る決心をし、次の日、教え子たちにおのれの出自を

明らかにし、学校を去っていく。その後アメリカ・テキサスへという段取りが進められる²⁾。

1.2. 『破戒』の出版史

島崎藤村の初の長編小説『破戒』は、1906(明治39)年、「緑蔭叢書第壹篇」として自費出版された。「吾々がエタである事を誇り得る時が来たのだ」「人の世に熱あれ、人間に光りあれ」と堂々と『宣言』した全国水平社が創立される(1922[大正11]年)、その16年前に、作品中の思想家に「我は穢多なり」と宣言させた『破戒』が発表されていることは、やはり銘記されるべきであろう。

水平社創立大会直前にあたる1922年2月22日、『破戒』は『藤村全集』(藤村全集刊行会)の第三巻として、若干の字句の修正を加え「第三巻の後に」と題する回想文を付して刊行される。それから7年、つまり水平運動7年目の1929(昭和4)年、新潮社版「現代長編小説全集」第六巻・島崎藤村篇に収録される。この「長編小説全集」版は、「穢多」を「部落民」に書き換え、「序にかへて」と題する一文を付している。その「序にかへて」で、藤村は、「私の『破戒』も最早読書社会から姿を消していゝ頃かも知れない」「これは過去の物語だ」「曾てかういふ人も生き、又曾てかういふ時もあつた」と述べる[島崎藤村 1966: 532-533]³⁾。

『破戒』初版本は、この「長編小説全集」版をもって絶版になる⁴⁾。1939(昭和14)年になって、「定本版藤村文庫」(新潮社)の第十篇として再刊されるが、これがいわゆる改訂版『破戒』である。この改訂版には「再版『破戒』序」が付されている。その要旨は、上の「長編小説全集」版の「序に

-
- 2) 先に触れた灘本論文のタイトルは、「瀬川丑松、テキサスへ行かず」である。
 - 3) 字句の修正などについては、筑摩書房版藤村全集第二巻の「校異」[藤村 1966: 551-574]によった。
 - 4) それに関する事情については諸説あるが、本稿の論考上、必要とは考えないので、ここでは踏み込まない。

かへて」と同様なことを繰り返して述べ、あらためて、『『破戒』の時間的舞
台は、現時点とは程遠い過去であると力説している」[北小路健 1986: 400]。
また改訂版は、本文の後に付した『『破戒』の後に』で、「なるべく旧態を
保存することにして、大した斧鉞は加へていない」と言うものの、おびた
だしい改変を加えている [北小路: 401-408 および島崎: 551-574]。以後、
筑摩書房が1953(昭和28)年に『現代日本文学全集』第八巻『島崎藤村集』
を発行するにあたって初版本に復原するまで、出版市場に出ていたのは、
改訂版である。

1.3. 部落差別問題の視点からの問題構成

その初版本復原に対して部落解放全国委員会（部落解放同盟の前身）は、
『『破戒』初版本を復原する場合には周到な準備が必要であるにもかかわらず
筑摩書房がこの点を深く考えることなく『破戒』初版本を復原したことは
現在もなお、差別と貧困のどん底に苦しんでいる被圧迫部落民にどのよ
うな影響をもつか、という社会的効果に対して、全く考えるところがなかつ
たといわなければならない』と強い遺憾の意を表明し、運動側の見解を展
開する。そして、「日本文学史史上における『破戒』の歴史的意義にもかかわ
らず、藤村の被圧迫部落民に対する差別観の故に、『破戒』が差別小説の域
を決して脱していない』という「決定的な評価」を下している [部落解放
全国委員会 1954]。また、同時期、運動の側からは北原泰作がもう少し作
品そのものに沿いながら『破戒』を論じている。

北原は、「藤村は『破戒』の人物の会話のうちで、しばしば部落民は『皮
膚の色の違う異人種』とか『容貌が普通の人とは違う特別の種族』などと
いう表現を用いている。これは銀之助や文平など作中の人物の誤った差別
観念として描いているものではなく、藤村自身が抱いている偏見なのであ
る」として、『破戒』の底には作者藤村自身の「差別観念」「偏見」が流れ
ていると述べ、さらに、主人公丑松について、「部落民解放の道は、奴隷の
ような卑屈をすてて人間としての自覚に立つことから第一歩がはじまるの

であって、『破戒』の丑松のように素性を告白することで終わるのではない。われわれが丑松に期待することは、人間を蔑み差別するような不合理な社会を改革するために立ち上がって闘うことである。自分だけの幸福を追求してテキサスあたりへ渡るのでなく、三百萬人の圧迫されている仲間と共に解放のたたかいに突き進むことである」[北原 1953: 2-3] と、「部落解放（運動）」という視点から問題を指摘する。

時代は降るが、柴田道子は、被差別部落の古老の、「わしは若い頃、『破戒』を読んで、藤村のことをかたきのように思ったさ。ざっくばらんに〈橋むこう〉なんて、書かなくなつてよいじゃないか」という声を紹介している。さらに、「どこの部落の古老にも『破戒』に対する評判はあまりよくない。丑松に対して意気地がない、もう少し元気を出して差別に立ち向かって欲しかったという声が圧倒的である」(ある人は『破戒』は文学作品としては住井すゑさんの『橋のない川』よりすぐれていると思うが、部落差別を取りあげる姿勢が問題だと指摘していた)とも言う[柴田 1972: 84-86]。

また、土方鉄は飛鳥井雅道との対談の中で、例えば、丑松が教え子に告白する時の土下座に関して、「あの当時の社会における被差別部落の位置というものを考えてみたばあい、現実の問題としてもし部落民が身分をいつわって教師をしていたということがわかったらおそらくリンチにあいますよ」[飛鳥井・土方 1978: 130] と述べ、作品の時間的舞台を考えながら読まれることが必要だと語る。さらに、「『破戒』の丑松のように運動から逃げていく、あるいは部落から逃げていく男だという代名詞に使われる。／ですけど、じっさいには、高校生なんかがあれを読むと感動するんですね。感動して、一定の正義感なり、許しがたいという気持ちをそそるわけです」[同: 127] と『破戒』の再評価の必要性を主張するのであるが、その場合にも、『破戒』の中でくり返される人種起源説に関して「この問題については、部落はけっして人種問題じゃないんだという正確な知識をなんらかのかたちで伝えなきゃいけない」[同: 32] とクギを刺している。

基本的に、部落差別問題およびそれからの解放という視角からなされる『破戒』評価は、土下座に象徴される告白、テキサス行き、あるいは（起源説を含む）被差別部落の語られ方に焦点をあてている。その問題構成の仕方は、「語られる者」である被差別部落からの言説に限らず、例えば、現在比較的安価に入手可能な文庫本『破戒』に付された解題〔野間宏 1957および北小路 1986〕にも見られるところであるが、先に触れた、灘本言うところの「不幸な出会い」に出てくる野間宏の文章は、岩波文庫の解題を原典とするものである。その灘本は、丑松の土下座が屈服ではなかった、丑松はテキサスへ行ったわけではない、丑松は立派に闘った、などを論証しようとしているが、それは、語られ方の「読み」に異を唱え、一つのカウンタークレイムを申し立てていると言えよう。いずれにせよ、差別問題をめぐって、被差別者がどのように語られ処遇されているか、そうした事態に対して、どのような主体として立ち現われているかは、極めて重大なことからなのであるから、こうした問題構成になるのも当然であろう。

2. 『破戒』の同和教育への位置づけ

2.1. 語る者／語られる者

部落差別問題という視角からの『破戒』論は、前節で触れたものの他にも多数あるが、管見ではそのほとんどが、例えば北原や土方の論などに見られるように、作品が含み持つ弱点・限界をきちんと踏まえた上でどのように読まれるべきか、を明示的にせよ默示的にせよ、提示しているといえようが、「どのように読まれるべきか」ということでは、教育・指導という問題がたちあがってくる。そこで、この節では、『破戒』を教材とする同和教育実践に取り組んだ2人の先達の記録に注視してみたい。

東栄蔵は、「私は、一般的に『破戒』を読んだ高校生の反応には、大別して三つの類型があると思っている。一つは部落問題に無知・無関心な生徒の反応であり、一つは今日の部落解放の立場からの『破戒』への反発であり、そしてもう一つは文学の評価と解放運動の立場との異同をみすえた受

けとめかたである」[東 1977: 154]と言う。そして、「集団で『破戒』を読む場合、教師は部落の歴史や部落差別のしくみなどの基本をしっかり事前指導しておくことが必要であろう」[同: 155]と述べる。「作品の内的構造の独自性と部落問題の独自性が交わる座標の中でこの作品を照らし出すことこそ、『破戒』の新しい評価軸を発見する重要な契機となる」[同: 23]という東にとって、『破戒』の読書指導がめざすべきは、もちろん、「文学の評価と解放運動の立場との異同をみすえた受けとめ方」を可能とする方向である。東は『破戒』の読書指導を、文学教育であると同時に同和教育であるものとして位置づけている。

『破戒』が読むものに感動をあたえるのは、主人公丑松が同じ人間でありながら部落出身のゆえに社会から差別され傷つけられなければならないことへの、人間としての痛憤からだと思う。素朴な痛憤というものを、何よりも作品解釈のさいの基調として大切にしなければならないと思う」[同前: 24]。先に見た土方の評価と通じるものがある。問題の「告白」に関しては、「第二十章の丑松の『顕す』思想の選択の決意と第二十一章の『告白』の意味するものをより深くとらえるためには、個人と社会との重い力関係－自意識上の苦悩と社会的偏見へのたたかいの複合した契機に立たなければとっている」[同: 107]と述べる。

こうしたスタンスからの読書指導が、「同和教育にかなり熱心にとりくんできた」ことを背景としつつ行われていくのであるが、その指導を受けた高校生の感想文は、告白を取り上げたものが「その人数においても紙幅においても圧倒的に多かったばかりでなく、その感想の質もまた多様で、生徒たちの『破戒』における部落問題に対する関心の深さを物語っていた」という。そして、それらの受けとめ方における「丑松の告白の姿に感動し、勇気と純粋さを見出し、当時の部落差別に痛憤したものと、告白の場面に批判的でそこに逃避と弱さを感じとったものとの対照（肯定的なもの78編、否定的なもの18編、不分明なもの16編－引用者）」[同: 130-131]が報告されている。なお、紹介されている肯定的感想10編のうち「当時の部落差別

への痛憤」を読み取れるものは多くない。

また、作中の人物たちが「穢多は皮膚の色の違う異人種」という会話をしているところに着目する生徒が幾人かいたという。「しかしそれを作者の差別意識と受け取った者はなく、むしろ当時の人々の誤った部落観のありのままの反映として（リアリティーとして）受けとっていた。（略）被差別部落の出身でないことがこのことに敏感に反応しなかったのだという見方もできようが、また『破戒』という作品の流れ全体から受ける部落差別への憤りの中でそれがあまり気にならなかったこと」が生徒との話し合いで確かめられたという〔同前：138〕。東が誠実に丹念に指導していったであろうことが十分にうかがえる。

この東の『破戒』評価へのスタンスと教育実践に鼓舞され、「『破戒』は回避すべきである」という意見を乗り越え〔日下 1982: 153〕、『破戒』を教材とする同和教育実践を行ったのが日下正義である。

「丑松が、父の戒を破り土下座して出自を告白する卑屈さやテキサスへ開拓農民として旅立つ逃げにこそ、現代にかえしてまたとない同和教育の教材となる。いつの時代でも、困難を避け逃げに走ろうとする弱さが人間の中に見られるからである。つまり、『破戒』にこのような難点があることが、そのまま現在の部落問題や同和教育に対する問題提起にもなっているのである」〔日下：262〕

なお、こうした観点は、若干のニュアンスの違いはあれ東も共有するところである。

「今日の社会における人間の生き方が、丑松のようであってはいけないということを、今日の同和教育や解放運動の中で教訓として汲み出すことは、むしろ必要なことである。しかしそのためには、まず、『破戒』が書かれた明治期と現代とは峻別し、人権を保障する法もなく、まだ解放運動も組織されず、差別や偏見が当然とされていた明治の社会のなかに丑松を置いて、その状況の中で生きぬかねばならなかった被差別部落出身の教師丑松の苦悩を、客観的に把握することが前提になけ

ればならない」[東 1981: 243]。

いかに、現代の同和教育に『破戒』を活かしていくか。両先達の思いが伝わってくるが、「現在の部落問題・同和教育に対する問題提起」と位置づけるにしても、読者が「部落問題を『過去の物語』にしない」(北原泰作)ことを、どのように担保しうるのか。実際、同和教育・部落問題学習をうけてきたという学生達の多くが、部落差別を「過去の物語」ないしは、「遅れた意識の人々と差別される人々の物語」と認知しているのである。東や日下の時代からすでに20年以上もたっているのではないか、といわれるかも知れない。しかし、作者藤村自身が、すでに70年以上も前に、「これは過去の物語だ」「曾てかういふ人も生き、又曾てこういふ時もあった」という認識を示しているのだ。ここで、差別問題学習にとって発展的な「読み」の可能性を探るため、当面の問いを提示しておきたい。

- (a) 丑松の告白に関して、肯定的・否定的いずれにしても単なる「論評」に終わらせない方法はいかにして可能か。すなわち、告白のあり方が「良い／悪い」といった論評、あるいは「時代が時代だったから仕方がなかった」という歴史への封じ込め、さらには『破戒』を「丑松の問題」に閉じこめることの回避は、いかに可能か。
 - (b) 人間としての痛憤を大切にするとして、「当時の人々の誤った部落観のありのままの反映として(リアリティーとして)」の「当時の部落差別」に対する痛憤は、現代の問題へと無媒介に繋がっていくのかどうか。
 - (c) 上と密接に関わって「どの感想文にも共通してみられた」という、丑松を取り巻く人々の図式的理解(丑松を差別する校長や高柳ら／丑松に友情をもつ銀之助や志保[東 1977: 128])は、現代における日常の関係性に切り込み得るのか。
- * いずれにせよ、同和教育・差別問題学習の中で語る者(現代の私たち)は、『破戒』の中で展開される様々な関係性に対していかなる位置関係を措定しているかが問われるのである。

もちろん、本稿は、先達の実践を今日的視点から批判することが目的ではなく、むしろ、その成果を今日の実践において発展的に活かしていくことがいかに可能かを探ることにある。なお、日下の著作は、その後半の大部分が、生徒自身の感想文とそれをめぐる検討学習会の記録である。それゆえ、東の報告よりも生徒たちの生の反応がより多くうかがえる。そこで、日下の生徒達の読みに触れながら、上の問いをめぐる考察を進めていきたい。

2.2. 一方的に解釈され・語られる丑松

中学生達の感想文の基調も、やはり、差別・迫害を受ける主人公への共感と差別への痛憤がほとんどである。「差別された人達の気持ちに一步でも近づけるようにすることが大切だと思います」[日下：241]と、東のいう「部落問題を自分の問題として考える」努力をうかがわせるような感想文もある。日下もまた丹念な指導をしていった様子がうかがえる。

告白の部分に関しては、ここでも肯定・否定がみられる。特記すべきは、「私は前者の意見（土下座は、自分の出自を卑しいと認めるようなもので、謝る必要はない—引用者）に賛成です。なぜなら、丑松を卑しいとは思わないし、あやまることなんかないと思ったからです。ただ、丑松の性格としては、自分を慕ってくれている生徒達をだましていたのと同じことだと感じ、謝らずにはいられなかったのではないのでしょうか」といったように、「隠す」という言葉から解釈をひろげていくケースが見られることである⁵⁾。それに対して、日下は、「この推測が正しいかどうか、これは丑松自身どういうものの考え方に立っていた人なのか、そのへんまで突っ込んで考えていかないと、この行為を説明しきれないんじゃないかと思うんだが

5) ちなみに、先に触れた映画『破戒』でも「……実は私は部落民なのです。……嘘をついてはいけなと皆さんに教えました。この私が部落民であることを隠していて、恥ずかしいと思います。どうか許してください」という告白のあり方のような [http://hw001.gate01.com/raizo/eiga-hakai.html]

ね……。」という指導を行うが、生徒からの反応は「……」であった〔日下：237-238〕。

ここで先ほど提示しておいた問い(a)との関わりで、「隠す」ということに関して触れておこう。被差別部落と呼ばれるカテゴリーに属すること、それは一つの社会的属性である。ではなぜ、ある人々だけが、自分の属性の一部を告げなかつたというその一点で、「隠す」「だます」「嘘」という言葉を塗され、マイナス方向で語られ・解釈されなければならないのか。もちろん、『破戒』という作品が丑松の「告白」を軸にして構成されているのであるから、『破戒』を論じるということは、予め、丑松の告白(父の「隠せ」という戒めも含め)を語るよう仕組まれているようなものであろう。ただその時、語っている多くの人々(読者・生徒)には、そうした問題が立ちあわられることもないのはなぜなのか、それは果たして「嘘をつく」「隠しごとをする」などへと一般化できる問題なのかどうか、についてどれほど自覚的でいられるかが、同和教育・差別問題学習では重要になってくるのではないだろうか。

2.3. 差別—被差別の非対称性

さてここで、部落解放の父と呼ばれた松本治一郎の言葉に耳を傾けておきたい。彼もまた「(若き日に『破戒』を読んだ時—引用者)丑松の生き方に腹が立って仕方がなかった……子どもの前でなぜあのように土下座して泣いてあやまるのか。土下座してあやまらなければならぬのは差別者の方だよ」と言う。そして、『破戒』で一つだけよくできているところがある。それは、差別する側の意識や差別者の言動はよく書けている。やはり作者の本音が出たということか。(笑い)」と言うのだ〔松本 1968: 115-116〕。

「不可侵不可被侵」を信条として永年にわたって解放運動を続けてきた人物のいつわらざる心情であろう。解放運動の側から、丑松の生き方あるいは部落の語られ方に対して厳しい否定的評価がなされてきたことは先ほど見たところである。部落の語られ方に関しては、北原の言う「一般民」か

らする「異人種視」だけではなく、丑松の父の戒めの言葉、猪子蓮太郎が語る言葉、そして告白場面での丑松の「私は穢多です。不浄な人間です」と言った言葉が組上に載せられてきた。こうした言葉の解釈にも多くの論議が続けられてきている。一方、読者に「当時の部落差別」への痛憤をかき立てるのは、校長や高柳、文平らの「差別者」然とした役どころであろう。その時、「問題」として構成されることが圧倒的に少ないのが、丑松の親友、土屋銀之助である。では、松本治一郎が「よく書けている」と言う「差別する側の意識や差別者の言動」の中に銀之助を位置づけてみるとどういったものが見えてくるか。

北原は、初版本復原に対応して発表した2編の論文において、銀之助について述べている。

「銀之助は、師範学校時代から丑松の親友であるが、彼の友情は丑松の素性を知らなかったために続いたのである。銀之助は部落民に対しては強い差別観念を抱いている。丑松が告白したとき彼は『深い哀憐の心』を抱いていたにすぎない」[北原 1953: 2]。

「丑松の親友の銀之助は、科学的教養の高い教員でありながら部落民を異人種のように考えて賤視差別する強い偏見をもっている。彼が丑松に示す友情は師範学校時代から続いているが、それは丑松の素性を知らなかったから生まれたものだとしかうけとれない」[北原 1954: 62]。

「憐愍の観念」をひそませた「一般民」[北原 1953: 2]として銀之助が挙げられているのであるが、それが丑松の「親友」なのだ。ちなみに、1948(昭和23)年、劇団民芸が戯曲『破戒』を公演した際、「銀之助が最後まで〈同情的見地に立っているだけで部落民に対する封建的差別感を持っていた自分を悔悟してはいない〉ので、意識の発展を描いた」という[川端 1993: 173]。それでは「当時の人々の誤った部落観のありのままの」リアリティー(東栄蔵)は損なわれてしまうと思われるが、ともあれ、北原の場合と同様、銀之助の「意識・差別感」が問題にされていたことは確かであろう。

しかし、北原以降の『破戒』論において、銀之助の位置づけは、“問題は
あるが基本的に、善人・よき友”である。「人物」像としては私もそう思う。
東栄蔵は、丑松の告白を軸にして『破戒』の「構成を人間群像に表象され
る面からみると、ヒューマンズを母体とした面（猪子蓮太郎、風間敬之
進、土屋銀之助、お志保、さらに仙太や教え子たち）と、偏見ないし
ヒューマンズの敵役（高柳利三郎、小学校長、勝野文平、蓮華寺住職な
ど）に一応分けられよう。しかし同じヒューマンな面でも丑松と猪子蓮太
郎および丑松と仙太の場合と、風間敬之進、土屋銀之助、お志保などの近
代的善人とは異質である」[東 1981: 248]と言う。

しかし、これは先ほどの問い(c)に関わることであるが、丑松という人
物との関係ではなく、差別をめぐる関係（告白は差別－被差別関係のまっ
ただ中に位置づけられる）は、善意（善人）／悪意（敵役）といった短絡的
な図式で解析できるのであろうか。かといって、「彼も差別感を持っていた」
という結論に回収するのは、現代における生きた学習へはひらかれて
いかないだろう。

丑松と銀之助は「もとより銀之助は丑松の素性を知る筈がない。二人は
長野の師範学校に居る頃から、極く好く気性の合った友達で……互いに語
り合った寄宿舎の窓は二人の心を結びつけた」[第三章 (一), 36]という
ことになっている⁶⁾。親友という表現はないが、現代の若者の感覚からす
れば「親友」ということになろう。『破戒』は、おのれの出自とどう向き
合い、いかに引き受けるかという、丑松が抱え込まされたアイデンティティ
問題をメインストーリーとして展開していくのだが、そのメインストー
リーの傍らにあって軽くない位置づけをあたえられているのが「友情」で
あり「恋愛」であろう。物語の最終場面、飯山を去る丑松を教え子達とと
もに見送ったのも銀之助（友情）とお志保（恋愛）であったということは
それを象徴している。また北原が、先の二つの文章においてこの二人をや

6) 『破戒』からの引用は、新潮文庫によった。ページ数は新潮文庫のものである。

り玉にあげたのは、こういった「読み」も介在しているのではないだろうか。

大学生対象の講演で「青春の書としての『破戒』」という読みを主張する川端俊英は、銀之助を親友であり「理解者」と位置づける [川端：17]。あるいは、東や日下の紹介する高校生や中学生の感想文の中にも次のような評価を見ることができる。

「銀之助が丑松を何とかかんとかかばってやり、丑松の秘密は知らないけれど彼の良き理解者として描かれています」 [東 1981: 208]

「この物語で僕が一番好きなのは、銀之助である。彼は、友情を大切に
する立派な人物である。丑松に噂が立ったとき一生懸命にかばい、や
がてそれが本当だとわかってもお丑松を助けようとする。僕もこう
いう人物になるよう心がけたいし、またこういう人間とつきあいたい」
[日下：172]。

なお、中学生の感想文に対しては、以下のような議論がなされたことが紹介されている。

長崎「書き出しのところに、“僕が一番好きなのは銀之助である。彼は
友情を大切に
する立派な人間である。”と言っていますが、銀之助は
丑松をかばったことは確かな事実だけど、しかし丑松以外の部落の
人に対しては、はっきりした差別心を持っていました。それでも田
村君は、銀之助を立派な人物であるというのですか。」

田村「ここは、広い意味で銀之助をとりあげているのではなく、丑松
と銀之助二人の間だけを見ているわけです。だから僕は、丑松に対
する銀之助は友情を大切に
する立派な人間だと思
うから、そう書いた
わけです。」

日下「……いいのかな。……なければ、次の人。」 [日下：177]

いずれも、銀之助と丑松との関係のあり方を友情というストーリーで読んでいることがわかる。『破戒』の中で銀之助は徹底して善意の人として描かれている。多くの読者は、丑松の苦悩に共感し、「当時の部落差別への

痛憤」を感じたりしながら、銀之助に友情・善意を感じとるだろう。上の議論のように、「丑松以外の部落の人に対しては、はっきりとした差別心を持っていました」と認知したとしても、告白の後にも態度の変わらなかった銀之助は「友情を大切にする」立派な人なのである。友情、善意、理解。一方、無理解や偏見、差別性は時代の限界なのだ。これは、生徒達だけではなく、指導に当たる教員も共有した認識であったろう。そして、その限界を時代の中に閉じこめる時、土屋銀之助は『破戒』の登場人物のうち私たち現代人に最も近い人物の一人となるのではないだろうか。だからこそ、上のような評価をうけるのであるし、逆に、北原をしてその限界を現代に引きずり出させ批難せしめたのではないだろうか。

ところで、『破戒』における二人の関係は一般的にイメージされる友情のストーリーであろうか。「何とかかんとかかばってやり」「助けよう」とし、「理解」し心配する存在(=銀之助)とされる客体(=丑松)。もちろん、丑松がおのれの出自とどう向き合うかというアイデンティティ問題を抱え込まれたところから物語がはじまるため、おのずからそういった関係になるとはいえるのであるが、アイデンティティ問題をむりやり抱え込まれる側と、そうした条件などから自由でいられる、あるいはそういう条件の存在自体に思いのいたらない側の、この非対称は覆いがたい。

例えば、丑松がおのれの出自をめぐる懊悩に突き落とされる決定的なきっかけになる「下宿からの大日向(被差別部落出身者)放逐」を「……下らない。穢多が逐出されたって何だ。——当然じゃ無いか」[第三章(二), 39]と突き放す。たとえ、「もとより素性を知らない」などと状況設定しようが、この「親友」こそが、丑松の懊悩を日々深めていくという関係がそこにはある。そして善意の「親友」はそのことに「一向頓着」ないのだ。

もちろん、私は、銀之助を差別者として認定することにエネルギーを傾けるが「そこに含まれている重大な問題が徹底的に検討されることに役立つ」(北原泰介)などとは思わないし、積極的な意味があるとも考えない。ただ、この非対称的な関係のあり方にこだわることによって、現代社会の

日常性の解剖への可能性を探りたいのである。

3. 〈私たち／彼ら〉という装置

3.1. カテゴリーをめぐる協働実践

灘本昌久は、銀之助と丑松との関係について「丑松の前でたびたび差別的な会話をしたり、『あの瀬川君が新平民だなんて、そんなことが有って堪るものか』としかかばわなかった銀之助が、丑松の告白をまのあたりにして、(中略)同情している。安物の同和啓発映画なら、いきなり過去の自分を謝罪でもしかねないところであるが、ただ変わらぬ友情を淡々と描いているところが、かえって真実味を感じるのである」[灘本 1996b: 4] と言う。先ほどの中学生の「広い意味で銀之助をとりあげているのではなく、丑松と銀之助二人の間だけを見ているわけです。だから僕は、丑松に対する銀之助は友情を大切にする立派な人間だと思う」という評価に近い。灘本は、「丑松は告白により世の中全体を敵にまわすかのごとくであるが、もっとも身近な人間関係において、より多くを得たのである」[同前: 5] と結論づけている。

「安物の同和啓発映画なら、いきなり過去の自分を謝罪でもしかねない」。たしかに、啓発映画に限らず、同和教育や啓発場面では先の読めてしまう硬直したストーリーが数多くみられ、「自らの差別性に気づく」というおきまりの物語が、「内なる差別心」「内なる偏見」さらには「空気のごとく存在する差別意識」などといったこれまた、今や常識とさえなった言葉によって紡がれる。だが、灘本は、そうした「差別を語る〈常識〉的装置」[好井 2002: 163] への強い拒否反応から、丑松と銀之助の関係を友情というもう一つの〈常識〉的装置へと回収しているように思われる。先ほども指摘したように、限界をその時代に封じ込めてしまえば、土屋銀之助こそ現代の読者に近い人物なのだから、現代において部落差別を考えるにはもう少し、彼・銀之助に差別をめぐる関係性の中を生きてもらわなければなるまい。それはまた、先ほどの問い (b)、「当時の部落差別への痛憤」を

現代へと繋ぐ扉になっていくだろう。

まず、灘本がその問題性を指摘し、中学生が銀之助を「立派な人物」であるとすると根拠としてあげた、「かぼう」言説についてみていくことにしよう。丑松の出自に関する噂が小学校の教員達の耳に達し、職員室は丑松が「新平民」なのかどうなのかという話でもちきりになる。話をふられた銀之助の一連の発言を少し長くなるが引用しておこう（なお、銀之助の各発言の冒頭の数字は、便宜上つけたものである）。

- 1 「僕なぞは師範校時代から交際って、能く人物を知っている。あの瀬川君が新平民だなんて、そんなことが有って堪るものか。一体誰が言い出したんだか知らないが、もし世間にそんな風評が立つようなら、飽までも僕は弁護して遣らなきゃならん。だって、君、考えてみ給え。こりゃ真面目な問題だよー茶を飲むような尋常なこととは些少訳が違うよ」
(さらに詮索を続ける教員に向かって)
- 2 「そんなら、君、あの瀬川丑松という男に何処か穢多らしい特色が有るかい。先ず、それから聞こう」
(近頃非常に沈んでいる、と別の教員)
- 3 「沈んでいるのはあの男の性質さ。それだから新平民だとは無論言われぬ。新平民でなくたって、沈鬱な男はいくらでも世間にあるからね」
(穢多には独特の臭気があると言うが、とこれまた別の教員)
- 4 「馬鹿なことを言給え」「僕だっていくらか新平民を見た。あの皮膚の色からして、普通の人間とは違っていらあね。そりゃあ、もう、新平民か新平民で無いかは容貌で解る。それに君、社会から度外にされているもんだから、性質が非常に僻んでいるサ。まあ、新平民の中から男らしい毅然した青年なぞの産れようが無い。どうしてあんな手合が学問という方面に頭を擡げられるものか。それから推したって、瀬川君のことは解りそうなものじゃないか」
(では、猪子蓮太郎は？と言う問いに)
- 5 「あの先生はーあれは例外さ」[第十八章(二) 268-269]

これが、銀之助の示した丑松への「友情」「善意」である。なお、この会

話の直前には、後から会話に参加してきた銀之助に対して、それまでの会話の説明がなされている。

「何故そんな説が出たかというに、そこには種々議論も有ったがね、要するに、瀬川君の態度が頗る怪しい、というのがそもそも始まりさ。吾儕の中に新平民が居るなんて言触らされてみ給え。誰だって憤慨するのは至当じゃないか。君始めそうだろう。一体、世間でそんなことを言触らすというのが既にもう吾儕職員を侮辱しているんだ。だからさ、もし瀬川君に疚しいところが無いものなら、吾儕と一緒に成って怒りそうなものじゃないか⁷⁾。まあ、何とか言うべきだ。それも言わないで、ああして黙っているところを見ると、どうしても隠しているとしか思われぬ(後略)」「同前：267-268」

銀之助は、「穢多」「新平民」であることが、この社会においてどのような位置関係にあるのかをよく知っている。発言1は、文脈的に見て、“「新平民」と一緒にされるなんて自分の親友が侮辱された”という怒りの発言ともれるが、少なくとも、「新平民なんかとは違う」という言明である。このようなスタンスで教員達の「違いの詮索」に参加した銀之助は、後は、その詮索ゲームを協働して実践するだけである。

- ・この私の親友・瀬川丑松君が「あんな手合」であるはずがない、あってはならない(発言1)
- ・瀬川君には「あんな手合」の特色なんか無いではないか(発言2)
- ・沈んでいるって? 「あんな手合」でなくたって沈鬱な男はいるだろう(発言3)
- ・「あんな手合」は見ればわかる。それに僻んでいる。瀬川君のような毅然として学問のある青年など「あんな手合」から出てくるはず

7) 灘本の言うように、自分の出自がばれないように、「部落民への誹謗に同調していても不思議でない場面で、丑松は唯の一度もそうした行動に出ていないのである。何を言ったかと同じくらい、何を言わなかったかも重要であろう」[灘本1996a: 7]。それにつけても、そうしたことに気づかない親友銀之助の脳天気さよ。

がない (発言 4)

・猪子蓮太郎？彼は「あんな手合」の中でも例外だよ (発言 5)

やりとりの構造を明瞭にし、「穢多」「新平民」といった用語に引きずられないようにするため、「あんな手合」というネーミングを使いながら、発言の意味をまとめてみた。《「吾儕」「普通の人間」》とは決定的に違う《「あんな手合」「新平民」「穢多」》。この二分法装置の中で詮索ゲームが進んでいることがわかる。

このゲームは、銀之助が言い募る「違い」から外れてはいるが、「あんな手合」であることを自ら明らかにしている猪子蓮太郎のことがもちだされるや、それを「例外」扱いをしなければならなくなる。その瞬間、丑松「弁護」の論法は破綻し、ゲームは教員達の勝利で終わる。

「それ見給え。そんなら瀬川君だって例外だろう—はははは。はははは」[同前：270]。

銀之助は、丑松を弁護するにあたって、「あんな手合」とは違うという「論理」を繰り出すのだが、それはまさに、他の教員達と協働して「あんな手合」というカテゴリー化を行い、違いを詮索し、あげつらうことで、「私たち普通の人間」とは決定的に違う存在として「あんな手合」をあらためて構成しなおす。つまり、〈私たち普通の人間／あんな手合い〉、という図式をさらに堅固なものにしていくのである。これは、銀之助が元々そうした「差別意識」をもっていた、というにとどまらない大きな意味をもつ。偏見や差別意識があるから差別が起こるのではない。差別は、日々の具体的な関係の中の、具体的なカテゴリー化・意味づけをもとにした実践によって遂行されるのだ。銀之助は、それを今、他の教員達と協働して遂行した。

“瀬川君は例外だと言おうと、あんな手合であることに違いはない！それは土屋君、君が論証してくれたのさ”

しかし、いつだって善意の人、銀之助はそれに気づくことはない。こうした善意の人は、20世紀初頭の土屋銀之助にとどまらず、21世紀初頭の読者の中にも数多く見られるのではないだろうか。

3.2. カテゴリーの布置関係

上のやりとりの直後、丑松が職員室に入ってくる。丑松追い落としをはかる勝野文平が丑松に対し、丑松の敬愛する猪子蓮太郎をめぐって議論をふっかける。これに銀之助が加わる。このやりとりは様々な論者によって言及される場所であるが、確かにここでの丑松の行動は、『『隠す』とは似ても似つかぬ行動』[灘本 1996a: 4] である。その意味では、そのやりとり全てを見たいところであるが、ここでは、その一部に着目する。

勝野文平は、猪子蓮太郎のことを「空想家だ、夢想家だ—まあ、一種の狂人だ」「高が穢多じゃないか」「下等人種」などと罵倒し、丑松を挑発する。

「卑しい根性を持って、可厭に僻んだようなことばかり言うものが、下等人種で無くて君、何だろう。下手に社会へ突出ろうなんて、そんな思想を起こすのは、第一大間違いさ。獣皮いじりでもして、神妙に引込んでるのが、ちょうどその先生なぞには適当してるんだ」

「ははははは。して見ると、勝野君などは開化した高尚な人間で、猪子先生の方は野蛮な下等人種だと言うのだね。ははははは。僕は今まで、君もあの先生も、同じ人間だとばかり思っていた」

「止せ、止せ」と銀之助は叱るようにして、「そんな議論を為たって、つまらんじゃないか」

「いや、つまらなかない」と丑松は聞入れなかった。「僕は君、これでも真面目なんだよ。まあ、聞き給え—勝野君は今、猪子先生のことを野蛮だ下等だと言われたが、実際御説の通りだ。こりゃ僕の方が勘違いをしていた。そうだ、あの先生も御説の通りに獣皮いじりでもして、神妙にして引込んでいけば好いのだ。それさえして黙っておれば、あんな病気なぞに罹りはしなかったのだ。その身体のことまで忘れて了って、一日も休まずに社会と戦っているなんて—何という狂人の態だろう

う。噫、開化した高尚な人は、予め金牌を胸に掛ける積りで、教育事業なぞに従事している。野蛮な、下等人種の悲しさ、猪子先生などはそんな成功を夢にも見られない。はじめから野末の露と消える覚悟だ。死を決して人生の戦場に上っているのだ。その慨然とした心意気は一ははははは、悲しいじゃないか、勇ましいじゃないか」[第十八章(五) 278-279]。

このやりとりは、丑松の「闘い」として読むことができるのではないだろうか。その闘いは思想あるいは社会観をめぐる闘いであるとともに、アイデンティティをめぐる闘いでもあろう。「高が穢多」「下等」「神妙に引っ込んでいろ」。猪子蓮太郎に投げつけられた言葉であっても、それはおのが出自であるカテゴリー全体に対して貼りつけられたものである。まさに出自が暴かれようとしている極限的な場面で一步も引かず立ち向かっている。丑松は、この後、猪子蓮太郎横死の報にふれ「顕す」ことを決意するにいたるのだが、最早この時点で闘いをはじめていたとも言えるのではないだろうか。だからこそ、文平に痛烈な皮肉をもって反撃をくわえた丑松が、親友銀之助に、「若く剛く活々とした丑松の内部の生命に触れるような」印象を与えるのである[同前：279]。

一方の銀之助には、なぜ、これまで沈鬱の中にあつた丑松に活々とした内部の生命を感じるのか「不思議」である。これまで、蓮太郎からの悪い感化を心配し、沈鬱の原因を「病」に結びつけて考えてきた、「敵役の文平以上に鋭い詮索者」銀之助[渡部直己 1994: 33]には推し量ることができないのである。銀之助は、あの「穢多」「新平民」というネーミングに象徴されるような、丑松を追い込み、ある場所ある家族のもとに産まれたという一つの事実を負のアイデンティティ問題として抱え込ませ、具体的な排除・抑圧をもたらす、〈私たち普通の人間／あんな手合〉という二分法を自明なものとして生きている。その銀之助には、丑松の憤怒と苦痛、そのエネルギーのほとばしりは不思議なものであつたらう。

「止せ、止せ……そんな議論を為たって、つまらんじゃないか」「いや、

つまらなかない」。文平と丑松の議論に差し挟まれたごく短い丑松と銀之助のやりとりには、アイデンティティ問題をめぐる丑松と銀之助の非対称的な関係を見ることができるとは、これに関しては既に述べた(2.3)ので、ここでは、二人それぞれがおかれた社会的位置関係、カテゴリーの布置について考えてみたい。

ここで、先ほどの職員室における銀之助と他の教員とのやり取りをもう一度見てみよう。「新平民」「穢多」「あんな手合」。それほど長くもないやりとりの中、銀之助一人だけで三種類の呼び方をするのであるが、それ自体に、「ある集団にあてはめるカテゴリーを、当該集団以外の集団が所有している」[サックス 1979=1987: 24]ということが表われている。そして、「支配的なカテゴリーは、基本的に、人々が現実をどのように理解するのかを規定している」[同: 24-25]のだ。新平民と名づけようが、穢多あるいはあんな手合と名づけようが、それは、ある集団をカテゴリー化する側によって所有されている限り、恣意であって何ら不都合はない。銀之助の善意の熱弁と文平の悪意ある挑発、いずれも、カテゴリーの布置関係に基づいたものであり、その違いは、ある人物をそのカテゴリーから「例外扱い」するか「おしこめるか」にあるにすぎない。

作家土方鉄はその著『差別と表現』で、実際におこったできごとを紹介している。一つは、1971年、埼玉県のある郵便局。部落解放同盟埼玉県連の事務局長が、郵便物を窓口差し出したところ、同局長が、「あなたは部落って顔じゃないね」と発言したもの[土方 1975: 65]。今ひとつは1973年、関西地方のある町。被差別部落の青年が、同じ町に働きにきていた幼なじみで親友の青年から、口論の果てに、数回にわたり「四ツのくせに」とののしられる。部落青年は刺身包丁を見せて反省をうながすが相手は発言を繰り返して殴りかかってきた。もみ合っているうちに、相手の胸などを刺し、死に至らしめた事件[土方: 14-15]。いずれも30年以上前のできごとであり発言であるが、ディテールこそ異なれ同じような発言は今でも聞くことができるだろう。なお、土方は、前者の発言を、「一見、部落を否定

しているように見えるが、部落を特殊視しているのはあきらかである」[土方：65] ととらえている。

〔**のくせに／**には見えない(**のわりには)〕というカテゴリーへの出し入れは、**という被差別カテゴリーを構成しそれを「所有」する側の恣意にゆだねられている。私たちは、文平や「くせに」と発言する者の悪意に注視すると同等に、あるいはそれ以上に、銀之助や「見えないね」「のわりには」と発言する「善意」にも注視することで、〈私たち／彼ら〉という装置、カテゴリー化というしかけの解剖へと向かうことができるのではないだろうか。

毎年、多くの受講生が、差別は(文平のような)差別者然とした者と差別される「そんな人達」によって構成されているという推論構造を携えてやってくる。差別は、「過去の物語」「遅れた意識のもたらすもの」とされ、非日常化される。その時、差別は考える必要のないものとなる。

「普通」とは、参照物なしに構成されえぬカテゴリーであろう。「あんな手合い」「そんな人達」というカテゴリー構成がなされていく時こそが、「私たち普通の人々」というカテゴリー構成が実践されていく時である。こうしたカテゴリーの布置連関は、まさに銀之助のような善意の人々の実践によって日々構成され自明性を獲得していくのであるが、そうした視点は、もちろん明治時代の銀之助には獲得されていない。さて、現代の私たちはどうであろうか。

4. お わ り に

私の「同和問題論」2003年度の受講生が記してくれた「体験」。

「高校の頃、すごいかわいい女の子がいて、人気があったのだけど、その人が朝鮮に住んでいたことがあると知っただけで、周囲の人から全く相手にしてもらえず、ひとりぼっちでやがて転校していった」

次の週の講義は、この記述をもとに、まずは「知る前と知った後、さて

変わったのは誰でしょう」という投げかけから始まり、私たち（例えば、日本人）／あの人たち（私たちではない**）という二分法およびカテゴリー化の問題へと展開していくことになる。ちなみに、「朝鮮に住んでいたことがあると知った」というくだりは、「在日朝鮮人」ないしは「朝鮮人」だということを「知った」という意味であろう。講義がはじまればばらくは、「在日韓国人の方々がとても流ちょうに日本語を話されているのに少し驚いた」という程度の認識を示す受講生も多い。

差別とは、選択肢や可能性を奪うものである。人権学習の教材として利用されることの多いビデオ『青い目茶色い目』では、生徒が目の色によって分けられ、優／劣がつけられる。学校生活は目の色によって決められていく。「朝からイヤなことばかり」「何もする気が起きないよ」「仲良しの子と遊べないの」（NHK 放映時の字幕スーパー）という声は、おとしめられたカテゴリーの子のものである。見る者の反応（受講生）は、おとしめられる方（差別される側）に注視し、「やっぱり差別はされてみないとわからないものだと思います」などというものが多い。ところで、「仲良しの子」はどこへ行ったのだろうか。先生の差別のしかけに同化させられてしまっているのだ。

It seemed like Mrs. Elliott was taking our best friends away from us.

「友達を奪われた」のは、おとしめられた子、おとしめられなかった子双方であろう。奪ったのは、カテゴリー化による二分法装置に基づいた差別である。

差別の現実から目をそらさず、それが被差別者に強いるものにきちんと向かいあうこと。それを踏まえた上で、差別をめぐる関係のあり方そのものの解剖とその克服の道を探ること。それが差別問題学習に求められているのではないだろうか。

* 本稿は2002-2004年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）の助成をうけた「“人権と差別”の比較教育社会学」（課題番号 14510318）と題した一連の調査研究の

成果の一部である。

文 献

- 飛鳥井雅道・土方 鉄 1978 「日本近代文学における被差別部落——『破戒』の評価をめぐって——」『歴史公論』第4巻第11号, 雄山閣出版
- 部落解放全国委員会 1954 「『破戒』初版本復原に関する声明」『部落』第58号, 部落問題研究所
- 東 栄蔵 1977 「『破戒』の評価と部落問題」明治書院
- _____ 1981 「続『破戒』の評価と部落問題」明治書院
- 川端俊英 1993 「『破戒』の読み方」文理閣
- 北原泰作 1953 「『破戒』と部落解放の問題」『部落』第48号, 部落問題研究所
- _____ 1954 「『破戒』と部落解放運動」『文学』1954年3月号, 岩波書店
- 北小路健 1986 「『破戒』と差別問題」, 新潮文庫『破戒』所収
- 日下正義 1982 「『破戒』と同和教育」, 明石書店
- 松本治一郎 1966 「不可侵 不可被侵」『松本治一郎対談集: 不可侵 不可被侵』解放出版社 (1977), 所収
- 灘本昌久 1996a 「瀬川丑松, テキサスへ行かず (上)——『破戒』のキーワード『隠す』と『引き受ける』について——」『こべる』第40号, こべる刊行会
- _____ 1996b 「瀬川丑松, テキサスへ行かず (下)——『破戒』のキーワード『隠す』と『引き受ける』について——」『こべる』第41号, こべる刊行会
- 野間 宏 1957 「『破戒』について」, 岩波文庫『破戒』所収
- サックス, H 1979=1987 「ホットロッダー——革命のカテゴリ——」, 山田富秋・好井裕明編訳『エスノメソロジー——社会学的思考の解体』せりか書房
- 柴田道子 1972 「被差別部落の伝承と生活——信州の部落・古老聞き書き」三一書房
- 島崎藤村 1966 「藤村全集」第二巻, 筑摩書房
- 津田 潔 1991 「小説『破戒』参考文献目録」『部落』112, 部落問題研究所
- 渡部直己 1994 『日本近代文学と〈差別〉』太田出版
- 好井裕明 2002 「啓発映像を解読する」, 好井裕明・山田富秋編『実践のフィールドワーク』せりか書房

Summary

‘Practice of Categorization’ out of Good Faith

Nobutaka Oba

Hakai, which was written by Toson Shimazaki in 1906, is a story about ‘identity-problem’ of a young teacher Ushimatsu Segawa. Ushimatsu is Burakumin, a descendant of ex-discriminated class in Edo era. He was strictly warned to conceal his origin as Burakumin by his father, but he suffers a lot whether he should obey his father’s instruction or not and betrays his origin at last. When *Hakai* is read, most readers tend to focus on Ushimatsu’s confession and his consequent plan to go to the United States.

Ushimatsu has a closed friend named Ginnosuke Tuchiya. Ginnosuke cares about Ushimatsu and keeps being his closed friend even after his confession. He is a person of good intentions and friendship. He may be one of the characters whom modern readers can sympathize with most in the novel. However, when we read the story in terms of the relationship of discriminate-discriminated, we can notice another possible interpretation of the story.

When his colleagues pry about the origin of Ushimatsu, Ginnosuke resent them and says “Mr. Segawa is my best friend. He cannot be Burakumin. I can tell who is Burakumin. He is so smart and clever whereas they, Burakumin, vulgar and stupid”. This dichotomy of ‘We/They’ is very familiar to us in modern Japan. Ginnosuke may do it for Ushimatsu from good faith. But he, together with his colleagues, categorizes Ushimatsu as well as Burakumin as Other Being and exclude them from his ‘our’ society.

It is easy for us to notice and say something against discrimination caused by malice but we also need to pay attention to mechanism of categorization or exclusion process done by someone good intentions. *Hakai* shows them to us very clearly.